

# カンキツ育苗期の新たな殺虫剤を用いた防除体系

カンキツ育苗期の害虫に対する防除は、モスピラン、ダントツ、アクタラ、アドマイヤーといった**ネコチノイド**系殺虫剤が主体であるが、系統や特徴が同じ剤の連用となるため、各種害虫の薬剤抵抗性の発達が懸念されるほか、**アゲハ類やハマキムシ類などのチョウ目害虫の多発事例が増加**している。

そこで系統の異なる殺虫剤の防除効果を検討したところ、**ジアミド**系殺虫剤**エクシレルSEの100倍散布が有効**であった。

表1 エキシレルSEの100倍散布と育苗期に登録のある高濃度処理剤との比較（2年生早生温州）

薬剤名	供試倍率及び 処理方法	系統名	散布日	処理46日後（7/31）まで7～10日間隔で5回調査		
				アゲハ類	ハマキムシ類	アブラムシ類
				（延べ寄生数）	（延べ寄生数）	（延べ寄生数）
エクシレルSE	100倍	ジアミド系	6/15	4	10	394
エクシレルSE+ウララ50DF	100倍+10,000倍	ジアミド系+ピリジノカルボキシル系	6/15	0	0	29
エクシレルSE+コルト顆粒水和剤	100倍+4,000倍	ジアミド系+ピリジノアゾメチン系	6/15	1	0	3
アクタラ粒剤5	40g/樹	ネコチノイド系	6/15	10	18	123
ダントツ水溶剤	20倍を樹幹塗布	ネコチノイド系	6/15	5	51	126
（慣行）モスピラン顆粒水溶剤	4,000倍	ネコチノイド系	6/15、6/27、7/11	2	5	36
無散布		—	—	15	13	164

エクシレルSEの100倍散布はアブラムシに対する効果が劣るため、対アブラムシ剤を混用することで防除効果が安定する

ネコチノイド系剤にも高濃度処理の登録がある剤があるが、効果はあまり安定しない

表2 エキシレルSEの100倍散布による育苗期防除（1年生宮内伊予柑）

薬剤名	散布日	春枝調査（7/1）	夏枝調査（8/13）		秋枝調査（9/26）	
		ミカンハモグリガ 被害度指数	ミカンハモグリガ 被害度指数	葉欠損指数※	ミカンハモグリガ 被害度指数	葉欠損指数※
エクシレルSE 100倍	5/10、7/4、8/13	0.0	0.3	2.3 <sup>a</sup>	0.0 <sup>a</sup>	6.2 <sup>a</sup>
エクシレルSE 100倍 +アブラムシ剤混用	5/10、7/4、8/13	0.0	0.3	1.8 <sup>a</sup>	0.0 <sup>a</sup>	6.9 <sup>a</sup>
慣行防除区	5/10、6/3、7/4、 7/16、8/13、9/11	0.0	2.2	26.5 <sup>b</sup>	52.8 <sup>b</sup>	41.3 <sup>b</sup>

エクシレルSEの100倍散布は、春枝・夏枝・秋枝の伸長開始期に一度ずつの散布で高い防除効果を発揮する。



カンキツ苗木を加害するアゲハ類幼虫

※葉欠損指数：害虫の加害により欠損した葉の葉面積比率を集計、調査枝に被害が全くない場合は0、全損した場合は100  
なお、アブラムシ類の加害により萎縮・葉巻等した葉も程度別に欠損としてカウントした。